

オリンピックと政治に関する一考察 ―オリンピックの意義と未来―

A study of the Olympic Games and politics

1K05A041

指導教員

主査 宮内孝知先生

大谷 方人

副査 石井昌幸先生

諸言

目的現代の人々の生活の中でスポーツの存在が大きくなっており、スポーツの大衆化と専門化・プロ化がその最たる例である。しかし、スポーツは人々の欲求を満たすだけでなく、政治、経済、教育などの諸領域と関わりを持ち、レジャー活動から文化活動へ変化している。これが現れているのがオリンピックである。「スポーツは政治と分離すべき」という絶対的的神話はもはや過去の話であり、スポーツがいかに政治と関わっているのか、オリンピックを通して明らかにするとともにこれからオリンピックが進むべき道について考察を行う。なお、この研究は先行研究、新聞、雑誌、インターネットホームページ等による文献調査である。

構成と各章の要約

序章ではスポーツの定義、古代オリンピックについて触れ、近代においてオリンピックの位置づけについて検討した。スポーツの本質は遊びであり、古代オリンピックの目的は身体活動を通して自由、平等、平和というオリンピズムを体現することであった。しかし近代オリンピックにおいては経済、政治が具現化される場と化しているのである。

第2章からは実際に開催されたオリンピック大会について考察を行った。ベルリン大会は聖火リレーに見られるような国威発揚、プロパガンダとしてのオリンピックの始まりであった。ナチスドイツの作り出したこの流れは後々のオリンピックにまで影響を及ぼし、さらに第一次世界大戦へと向かう土台となっていくことがわかる。

第3章では東京大会での招致問題、日本とオリ

ンピックの歴史について考察した。東京での開催はアジア初となるオリンピックであり日本のナショナリズムの形成、国威発揚に大きな役割を果たしたのである。これはオリンピックが世界から注目されているということ、スポーツで好成績を収めることがよい国家であるというスポーツ思想善導に起因しているのである。

第4章では、メキシコ大会・ミュンヘン大会で行われた黒人のパフォーマンスやテロに見られる政治問題との関連について考察した。この時代はスポーツの注目度の高さを利用した政治手段としてオリンピックが行われていたことがわかる。オリンピック自身によって新たな政治性が付加されていくという結果になる。

第5章では、モスクワ大会・ロサンゼルス大会のボイコットからオリンピック自身の持つ政治性を明らかにした。オリンピックを取り巻く政治に加え、オリンピックへの参加の自由の権利さへも政治的なものとして捉えられていくのである。

第6章では、ソウル大会が国際社会にもたらした国交回復とドーピング問題について述べた。ここでは今までと違った政治的側面が見えてくる。スポーツが世界共通の言語と言われるように、外交手段として有効に用いられるのである。また、もう一つの特徴として商業主義におけるドーピング問題が表面化したオリンピックでもあった。

第7章では、今年開催された北京オリンピックの諸問題を例に挙げ、再びオリンピックと政治のつながりを考察した。北京オリンピックは、聖火リレー、ナショナリズム、人種などの問題が再浮上し過去の大会の集大成とも言える大会であった。そして

スポーツがこれから進むべき道はどのようなものなのかを述べた。これは現在の中国にある格差問題、環境問題、人種問題に凝縮されており、この問題は世界共通のものであった。

結論

過去の国威発揚型、冷戦代理戦争というオリン

ピックは終焉を迎えつつある。国家によるオリンピックではなく、人々の手によるオリンピックへと移行していくと考えられる。スポーツとボランティア、スポーツと新興国、スポーツと環境など新たな政治との関わりの中でオリンピックがどのような役割を果たすのか、これこそオリンピックが現代で存続していく鍵となる。